

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520551

研究課題名（和文） 大学入試センター試験リスニングテスト導入の高大英語教育における波及効果の解明

研究課題名（英文） Investigation of Washback Effects of the National Center Listening Tests on English Education in High Schools and Universities

研究代表者

齊田 智里（SAIDA CHISATO）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：50400594

研究成果の概要（和文）：

大学入試センター試験への英語リスニングテスト導入による高大英語教育への波及効果の解明に取り組んだ。リスニングテストの内容はCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）のA2からB1レベルの能力記述文に相当すること、関東地方にある一国立大学入学者全員の大学入学時のリスニング得点の平均値は、リスニングテスト導入前に比べて導入後は若干上昇傾向にあること、リスニング力の伸びを実感している学生の割合は7割程度と高く、音声に意識を向けて英語学習に取り組む習慣が身についたなど、プラスの波及効果が認められること、一方、高校英語授業においては、テスト対策が主であり、教員の指導法そのものに変化をもたらすほどの顕著な波及効果は認められなかったこと、などが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This research explored the washback effects from the English Listening Test added to the Center Test for University Entrance Examinations on English learning and teaching at secondary schools. It was found that the Center Listening Test corresponds to the can-do statements from the A2 or B1 levels of the CEFR (Common European Framework of Reference for Languages). The average listening scores on placement tests administered to all freshmen at one national university in the Kanto area have increased considerably since the introduction of the Center Listening Test. Some positive washback effects were also identified on learning English. Two-thirds of the freshmen in the university showed confidence in their listening ability and stated they had come to focus more on sounds and pronunciation. However, there was little positive washback on teaching English other than teachers spending more time conducting mock listening tests in their classrooms.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2012年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

 キーワード：大学入試センター試験・英語リスニングテスト・波及効果・学習指導要領
 ・カリキュラム・学習法・指導法

1. 研究開始当初の背景

大学入試センター試験は日本を代表するハイスタークスのテストである。「実践的コミュニケーション能力」の育成を外国語科の目標とする改訂学習指導要領（平成 10 年度改訂）が高等学校で平成 15 年度から年次進行で実施されたことを受けて、平成 18 年度大学入試センター試験から英語リスニングテストが導入された。毎年 50 万人程度が受験をする大学入試センター試験リスニングテスト導入の高大英語教育への波及効果を解明することは、日本のみならず国際的にも学術的価値のある研究である。しかし、本研究開始当初には、そうした研究はまだほとんど行われていなかった。

2. 研究の目的

大学入試センター試験リスニングテスト導入における高大英語教育への波及効果を、カリキュラム、指導法、学習法の諸側面から解明することを目的とする。

具体的には、まず妥当性検証の一環として、センター英語リスニングテストが、他の国際的な英語試験や外的基準に照らして、どのような関係にあるのかを調査する。

次に、リスニングテスト導入前後の大学入学時点における英語力及びリスニング力の経年変化を関東地方の一国立大学の新 1 年生全員を対象とした英語プレースメントテスト結果をもとに、リスニング得点向上という形でプラスの波及効果が表れているかどうかを検討する。

さらに、①高校生の学習方法、②高校教員の指導方法、③高校及び大学のカリキュラム、の 3 つの観点において、どのような波及効果が見られるのかを、量的かつ質的な方法により解明を進める。その際、研究代表者が研究拠点を置く地域に密着した波及効果の解明を目指すこととする。

3. 研究の方法

(1) 海外で大規模テストの波及効果に関する研究では、まず、テストの妥当性検証が行われている。本研究では妥当性検証の一環として、高等学校段階における基礎的な学習の達成度を判定することを主目的とする大学入試センター試験のリスニングテストが、国際的な外部基準に照らしてどのように位置づけられるかを検討することにした。国際的な外部基準として、学術的な英語力を測定する TOEFL (Test of English as a Foreign Language) と、ヨーロッパ共通言語参照枠

(CEFR) に示される能力記述文を選んだ。大学入試センター試験受験者に TOEFL PBT を受験してもらい、スコアの関係を検討した。また、センター英語リスニングテストの内容と

CEFR のリスニングの能力記述文とを照らし合わせて、日本の高等学校卒業段階における英語力が国際的な基準でどの程度に位置づけられるかを検討した。

(2) 関東地方にある一国立大学の入学者全員を対象に入学直後に実施されている英語プレースメントテスト得点をもとに、センターリスニングテスト導入前と導入後の英語得点及びリスニング得点の年度ごとの平均値を比較し、波及効果が得点上昇となって表れているかを 5 年間のテストデータ分析をもとに検討した。

(3) 学習者の学習法への波及効果を解明するために、国立大学 1 年生を対象に、センター英語リスニングテストとの関係で高校時代の学習法に関する質問紙調査を作成し、実施した。さらに、国立大学生新 1 年生を対象に英語学習全般に関する質問紙調査を作成し、3 年間継続して得られたデータを量的、質的に分析し、波及効果を検討した。

(4) 高校教員の指導法への波及効果を解明するために、センター試験英語リスニングテストとの関係で英語指導法に関する質問紙調査を作成し、現職の高校教員（中学校も含む）に対して実施し、結果を量的、質的に分析し、波及効果を検討した。

(5) 高校の英語カリキュラムへの波及効果を解明するために、(2)、(3)、(4) で得られたデータの精査を行い検討した。さらに国立大学を中心に、英語カリキュラムの改革状況を調査検討した。

4. 研究成果

(1) リスニングテストの音声は、明瞭な発音で比較的ゆっくりとしたスピードで 2 回繰り返される。内容は、2 人の日常的な会話（短いものからやや長いものまで）と一人の話し手による日常生活レベルの説明文（天気、学校生活、旅行、製品案内、数字の読み取りなど）となっており、CEFR の「聞く受容的活動」に示される能力記述文に照らしてみると、A2 から B1 レベルの内容に相当することがわかった。

次に、大学入試センター試験と TOEFL PBT の両方を受験した 226 名のスコアをもとに 2 つのテストの関係を調べたところ、センターリスニングテストと TOEFL PBT のリスニングセクションとの相関係数は 0.43、センター合計点（英語筆記＋リスニングテスト）と TOEFL PBT の合計点（リスニングセクション＋文法語法セクション＋リーディングセクション）との相関係数は 0.55 で、両者には中程度の

相関がみられた。同じような英語力を測るテスト間には通常 0.6 程度の相関係数がみられるが、今回の相関係数が 0.6 よりやや低くなっているのは、日常生活における英語力を問うセンター試験と北米の大学における学術用英語レベルが求められる TOEFL とでは、内容が重なりがそれほど大きくないこと、さらに、両者の試験の平均的難易度に相当の開きがあること、といった理由が考えられる。

センター英語合計点（英語筆記問題 200 点満点＋リスニングテスト 50 点＝250 点満点）から TOEFL 合計点への回帰式を求めたところ、TOEFL PBT450 点（TOEFL iBT45 点相当）は、センター英語合計点は 233 点に相当することがわかった。233 点はセンター英語試験で 93.3% の得点率である。一般の高校生に TOEFL スコア（TOEFL PBT450 点、TOEFL iBT45 点相当）を高等学校卒業段階での基準として課すには、相当の高水準であることが示唆される。

（2）関東地方にある一国立大学の入学者全員が受検をする英語プレースメントテスト得点を調査したところ、リスニングテスト導入前の 2005 年度と比べて、2006 年度以降のリスニングの平均点に若干有意な上昇傾向がみられた。入学者の学力層が必ずしも毎年一定であるわけではないので、この結果だけからはプラスの波及効果の表れとはいいがたいが、同じ集団によるリーディングや文法・語法の平均点が増加傾向にはないことを考慮すると、リスニング得点の若干の上昇傾向はプラスの波及効果を示唆しているとみることもできよう。

センター英語リスニングテスト対策の開始時期と大学入学後のリスニング得点との関係を調べたところ、高校の段階（高校 1 年生、高校 2 年生、高校 3 年生前期、高校 3 年生後期、高校 3 年生直前、対策をせず）で早く開始すればするほど、また定期的にリスニング活動を行っていけばいるほど、大学入学後のリスニングの平均点が高い傾向が見られた。さらに英語学習開始を小学校低学年、中学年、高学年、中学校と分けて調べたところ、やはり開始時期が早ければ早いほど、大学入学後のリスニングの平均点が高くなる傾向が認められた。

（3）学習方法や学習意欲への波及効果を調べるために、国立大学 1 年生を対象（1100 名程度）としたリスニングテストに関する質問紙調査と、英語全般に関わる質問紙調査を 3 年間継続して国立大学新 1 年生全員を対象（約 6000 名）に行った結果をあわせて分析した。英語意欲の向上やリスニングのコミュニケーションにおける重要性の認識の高まり、リスニング力が伸びたと実感している学習者が 7 割程度であることなど、プラスの波

及効果が認められた。

英語学習方法では、問題集や教材付属の CD を聞くといったテスト対策が中心で、テレビ等の英語講座の活用や英語を普段の生活で聞くといった割合はまだそれほど高い水準であるとはいえなかった。

一方、英語 4 技能の学習のうち好きな技能としてリスニングを上げる回答者の割合は他の 3 技能に比べて最も低く、さらに、リスニングを好む割合が年々低下する傾向がみられた。大学入試へのプレッシャーと不安が影響している表れかもしれない。実際、リスニングに苦手意識を持つ学生がずっと不安を持ち続け、英語学習量の増大に負担感が増す結果、一層英語が嫌いになっていることもデータから示された。

（4）英語指導法への影響について、主に公立高校教員への質問紙調査を行ったところ、約 60 名から回答が得られた。テスト対策を行うようになったと回答したのは 6 割程度で、生徒の進学実態を反映していることがわかった。国立大学への進学志向が強い高等学校では、リスニングテスト対策が早い段階から計画的にカリキュラムに組み込まれているが、そうでない高等学校では特にリスニングを高めようという工夫は学校全体の取組としてはあまりみられなかった。

学習者に対する質問紙調査結果からは、高校英語授業は文法訳読が中心、と回答した割合が 7 割以上であった。教員自身も授業でリスニング活動や英語をより多く使用しようという意識の向上はかなり見られるものの、テスト導入によって指導法そのものが変化したと回答した割合は低かった。

教員が普段の指導法を変化させるに至るまでにはセンター英語リスニングテストの導入だけでは十分ではないことが伺えた。指導法に影響があるものとして、他の教員の英語授業をみるといった研修を回答した教員の割合が最も高かった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① 斎田智里、学習指導要領の改訂と英語学力の変化－英語教育政策、教員、生徒の英語学習に対する認識のずれ－、新英語教育、査読無、11 月号、2012、7-9.
- ② 斎田智里、西尾由里、茨城大学の英語教育プログラムにおける TOEFL 活用の可能性に関する調査研究②－成績評価・卒業要件・プログラム評価の観点から－、茨城大学人文学部紀要、査読有、第 12 号、2012、157-170.

- ③ 齊田智里、授業満足度と成績に影響を及ぼす授業評価要因の検討ー大学英語教育プログラム改善の観点からー、Annual review of English language education in Japan、査読有、第 23 号、2012、389、403.
- ④ 齊田智里、柳川浩三、共通項目デザインによる神奈川県高等学校「県下一斉英語学力テスト」の開発ー項目応答理論を用いた等化によるテストの再評価と展望ー、日本テスト学会誌、査読有、第 7 号、2011、121-132.
- ⑤ 齊田智里、大学英語に求められる評価とは、英語教育、査読無、第 60 号、第 2 巻、2011、32-34.
- ⑥ 齊田智里、小林邦彦、茨城大学の英語教育プログラムにおける TOEFL 活用の可能性ー習熟度別クラス編成・英語学習の動機付けに関する調査研究ー、茨城大学人文学部紀要人文・コミュニケーション学科論集、査読無、10、2011、121-138.

[学会発表] (計 8 件)

- ① 齊田智里、熊谷龍一、英検 Can-do リストの DIF 分析の試み、2012、全国英語教育学会第 38 回愛知研究大会、愛知学院大学
- ② 齊田智里、他 5 名、英語学力テストの項目困難度及び項目識別力に影響を及ぼす要因の検討、2012、関東甲信越英語教育学会第 36 回群馬大会、共愛学園前橋国際大学
- ③ 齊田智里、英語科における「パフォーマンス評価」：「観点別テスト」から「パフォーマンス課題」まで、2012、平成 24 年度横浜国立大学附属鎌倉中学校研究協議会(招待講演)、横浜国立大学附属鎌倉中学校
- ④ 齊田智里、Development of a common scale for language assessment and program evaluation of university English education using in-house placement tests、大学英語評価のための学内プレイスメントテストを活用した共通尺度の開発、2011、第 50 回 JACET 国際大会、西南学院大学
- ⑤ 齊田智里、英語科における「思考力・判断力・表現力」を育成するテストと評価、平成 23 年度横浜国立大学附属鎌倉中学校研究協議会、2011、横浜国立大学附属鎌倉中学校
- ⑥ 齊田智里、思考力・判断力・表現力等を育成するパフォーマンス評価ー目標に準拠した学習評価を行うためにー、平成 23 年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会、2011、常陸太田市市民交流センターパルティホール
- ⑦ 齊田智里、柳川浩三、項目応答理論を導

入した「県下一斉英語学力テスト」の開発ー神奈川県高等学校英語部会の試みー、第 36 回全国英語教育学会大阪研究大会、2010、関西大学

- ⑧ Chisato Saida、Investigating CEFR levels of Japanese university students with DIALANG、32nd language testing research colloquium (LTRC)、2010、University of Cambridge、U.K.

[図書] (計 2 件)

- ① 卯城祐司(編著)、英語リーディングテストの考え方と作り方、研究社、2012、222.
- ② 石川祥一、西田正、齊田智里 編集、テストイングと評価ー4 技能の測定から大学入試までー、英語教育学大系第 13 巻、大修館書店、2011、302.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齊田 智里 (SAIDA CHISATO)
 横浜国立大学・教育人間科学部・教授
 研究者番号：50400594

(2) 研究分担者

なし ()
 研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
 研究者番号：